

## 留学生授業の展開

— 授業での留学生による学習支援 —

A Progress Report on Learning Program with International Students

— Advantages of Multinational Interaction and Assistance —

英語科 光田 怜太郎

地理歴史科 小太刀 知佐

### <要旨>

2016年度よりSGH-A（スーパーグローバルハイスクール・アソシエイト）校の実践として始まり、2017年度には平成29年度東京学芸大学「特別開発研究プロジェクト」として採択された留学生授業について、その進捗状況を報告する。英語の授業における生徒の自己評価は年間を通して上昇している。また、探究活動や地歴公民の授業などでも留学生の学習支援が展開している様子が見られる。

<キーワード> 異文化交流 SGH 留学生 スピーキング 4技能育成 探究

### 0. 本稿について

本稿は、昨年度の本紀要（光田、小太刀（2018））に引き続き、2016年度よりSGH-A（スーパーグローバルハイスクール・アソシエイト）校の実践として始まり、2017年度には平成29年度東京学芸大学「特別開発研究プロジェクト」として採択された、「留学生授業」についての進捗状況を報告するものである。（プロジェクトの名称は『高大連携による「話すこと」に着目した英語教育の実現～留学生による参加型授業の構築～』であり、プロジェクトは2ヶ年に渡って行われる。）第1・2・3・5章は光田怜太郎（英語科）、第4節は小太刀知佐（地理歴史科）が執筆した。

### 1. 本研究について

#### 1.1 趣旨・概要

グローバル化が急速に進展する中、次期学習指導要領では、知識・技能に加えて思考力・判断力・表現力の育成に焦点が当てられている。高校では英語教育を通じた発信力・対話力の向上が一層求められるが、その方法について具体的な授業プログラムの提案が十分に行われてきているとは言えない。また昨今、高校までに培った力を発展させ社会に送り出すべく高大接続の必要性が主張され、高等学校・大学の双方が連携した教育の在り方を検討する必要性も高まってきている。これらのニーズに鑑み、本研究では、高大が連携して行う英語授業カリキュラムの開発を目指している。

具体的には、本校にて生徒全員が履修する「英語表現

II」（2年次）の授業に10名程度の留学生（大学生や教員研究生）を年5回程度招き、対話中心のアクティブラーニングの機会を設ける。生徒たちは普段の「コミュニケーション英語」や「英語表現」の授業で学んだスキルを活用して、留学生に日本文化を紹介したり、身近な話題から社会的な問題についてディスカッションをしたりすることを通して、英語による発信力および対話力を鍛える。また、同高校はSSH（スーパーサイエンスハイスクール）の指定を受けており、次期学習指導要領より設定される「総合的な探究の時間」に先行する形で、平成28年度より学校設定科目「SSH探究」を実施している。平成29年度より、探究活動の口頭発表や最終論文を英語で行うことを選択したグループ「英語特講」（約10名程度が選択）を創設した。中間発表会や最終発表会などの場に留学生が参加し、英語によるプレゼンテーションとその質疑応答を、日本語を母語としない聞き手に対して行うことにより、「話すこと」に関する二領域である「やり取り」と「発表」の力を育成する。同時に、探究活動の本質として、教科・科目等横断的な知識の運用や課題解決の資質・能力向上においてもよりグローバルな視点から育成できることが期待できる。

さらに本研究では、これらの授業実践に加え生徒の意識調査やループリックを用いた自己評価等を用い、生徒の情意面や動機付けがどのように変容していくかを追跡し、生徒の英語でのコミュニケーションやプレゼンテーションへの意欲を高めるカリキュラム開発を目指す。

このカリキュラムは、留学生がいる大学の附属高校だ

けでなく、各学校の近隣の大学に通う留学生や、地域在住の外国人を対象とすることで、一般の高校において実現可能な授業プログラムであることから、日本の学校現場の国際化にも広く貢献する可能性を含んでいる。

本研究における授業実践は、留学生が訪れる時だけの一時的な効果を狙うものではなく、「話すこと」に対する根本的な態度の育成を目標とする。留学生が参加する授業が終わった後、日本人生徒だけで行うディスカッションやディベート等を授業に取り入れることで、留学生がいなくても積極的に英語でコミュニケーションをとる態度の育成を目指す。

## 1.2 留学生の参加する授業

本年度で三年目となる、留学生を招いた学習活動は、徐々にその学習場面が広がっている。2018年現在、本校では次の3つの正規の授業で留学生が授業に参加し、生徒の学習を支援している。

- ①英語科「英語表現Ⅱ」
- ②SSH 探究 英語特講
- ③公民科「現代社会」

次章より、順番にその内容と成果を報告する。

## 2. 英語科における実践

### 2.1 授業の展開

英語表現Ⅱの授業において、年間5回程度さまざまな国出身の留学生を、40人規模の学級に8～10名程度招く。教室では生徒をその日に参加した留学生の数に合わせて班を作る。例えば、10名の留学生が参加したら、4人の班を10班作る。結果、留学生一人に対し、数名の日本人生徒の班が編成され、一人一人が留学生と英語で話す時間と必要性を与えるのが本授業の狙いである。なお、この授業は、本校では「留学生授業」と呼ばれており、本稿でもこの名称を使用する。

なお、留学生の人数に合わせて班を編成するため、当日留学生が欠席等をして予定されていた人数に変更があった場合、班の数もそれに合わせて変わる。40人を7班に分けたり、9班に分けたりするのには時間がかかり、そのようなことに時間を割くことを回避すべく、あらかじめ座席に基づいた班編成をエクセル等で作成しておき、それをプロジェクターに映して班編成の指示を行う。この座席表は班の数（＝参加留学生の人数）に応じた分だけあらかじめ用意しておき、当日の班の数に合わせたものを提示する。

まず、授業の最初に留学生に前に並んでもらい、自己

紹介をしてもらう。様々な国から来ていることを理解するためである。その後、各班に留学生を一人ずつ配置する。(写真1) 教師はそこで班内で自己紹介をするよう指示をするが、そのような指示がなくても、自然にコミュニケーションが発生する。仮に「自然に」発生しなくても、留学生の側から声かけをするので、お互いの名前の交換などはできる。留学生はTAとして、話し合いを活発にする役割を持っているのだが、これについては、次項で述べることとする。



写真1 少人数の班に留学生がつく様子

生徒と留学生のグループが完成したところで、目的もなく「自由に話し合しましょう」では、授業にはならない。教師の側からトピックを与えて話し合う。20分ほど話し合ったのち、各班から、どんな内容を話し合ったか、日本人生徒および留学生がプレゼンテーションを行う。

プレゼンテーションは、それを聞くことで留学生と話し合う時間が短くなることを不満に思う生徒がいなくても、他の班ではどのような意見がでたのか、教室で共有することを重視するためにおこなっている。とりわけ、他の班に配属された留学生は違う文化圏の留学生であることも多い。自分のグループでの話し合いの内容を伝え、他のグループのそれを聞き取ることを、英語で行う発表の大切な場として設定している。(写真2)

授業の展開について、より詳細は光田,小太刀(2018: 65-74)を参照されたい。



写真2 生徒と留学生のプレゼンテーション

## 2.2 留学生の出身国とその役割

留学生について、アジア・アフリカ・ヨーロッパなど世界の様々な地域から参加している。ここで重要なのは、英語を母語としない留学生が参加しており、むしろ母語話者の方が少数であることである。英語の学習なのだから、英語母語話者に参加してもらって然るべきだという考え方もあるかもしれない。しかし、実際には英語の使用者は非母語話者の方が多く、その現実をこの留学生授業が体现しているのである。生徒は、例えばアラブ圏からきた留学生の英語の発音に戸惑いを覚えることも多い。しかし、その中で実際にコミュニケーションを取る体験を通してイギリスやアメリカの発音こそが正しい、という思い込みを払拭させる意図がある。実際、アンケートの中でこのような人達との交流に対して、不満はなかった。さまざまな文化圏の人が英語を使用することが理解できれば日本人訛りがあっても恥ずかしくないという意識につながっていくことは予想できることである。そしてこれは、よりコミュニケーションへの関心意欲態度の増進につながっていく効果が期待できる。

留学生は、TAとしてグループのリーダーシップを取る必要があることを事前に説明する。具体的には次の3点が求められる。

- ① 黙っている生徒に意見を求める声かけをすること。
- ② 話し合いを継続させること。
- ③ 楽しい雰囲気をつくること。

幸いなことに高校生との活発な話し合いを楽しく感じ、

リピーターとして戻ってくる留学生が多い。複数回参加している間に、グループのまとめ方にも慣れていっていきようである。

## 2.3 各回のトピックの内容と目標

各回のトピックは、2017年度は次の5つを扱った。2018年度も同様の話題を扱う予定である。ここでは、5つのトピックとその目標を記す。

### 第1回 名前の由来：

それぞれの生徒と留学生が持つ名前の由来を説明し、そこに文化的背景の違いがあることを理解する。目標は、話しやすい話題で外国人と話すことである。

### 第2回 日本人の不思議な習慣：

リーディング事前課題として文章を読みその内容を相手に伝え、それについて意見交換をする。目標は、事前に呼んだ英文を取り込んで留学生に伝え、日本のことについて英語で話すことである。

### 第3回 お互いの国について知る：

留学生の国や日本について相互に質問をする。目標は、平易な話題について、英語を多く話すことである。

### 第4回 外見とステレオタイプ・偏見：

時事問題を扱い、意見交換をする。このときは、テレビ番組で髪染めを学校する学校があり、またテレビタレントが顔を黒塗りすることが人種差別として疑われたりした。そのことについて議論をした。この回は、その特性から毎年話題を更新する。目標は、英語を用いてやや難しいながらも最近の社会事情を話し合うことである。

### 第5回 世界平和のために何ができるか：

ライティング課題として事前に考えをまとめ作文したうえで、意見交換をし、班で一つのアイデアをまとめる。目標は、事前に考えてきたアイデアを班で共有し、まとめあげるディスカッションを行うことである。

話し合いを活発にすることを狙ってトピックを易しめにする回と、ある程度考えをまとめて意見交換をする回を混ぜている。また、目的に応じて事前課題を課す回もある。

	キャブストーン	マイルストーン		ベンチマーク
	4	3	2	1
コミュニケーションの展開	会話が夢中になることができる。	会話に興味をもち積極的に参加できる。	グループの会話が途切れないよう、言葉が発することができる。	グループの会話が途切れることがあるが、意思表示はする。
話すこと	自分の考えを伝えたり、話題を発展させたりすることができる。	自分の考えをしっかりと伝えることができる。	自分の考えを断片的に伝えることができる。	尋ねられた際、返事や応答を行う。
聞くこと	話の展開を予想しながら聞くことができる。	相手の考えをしっかりと理解することができる。	相手の考えを断片的に理解することができる。	何について話しているのかを理解する。

表1 ルーブリックによる自己評価

## 2.4 スピーキングの評価について

小泉・印南・深澤(2017)は、スピーキングテストについて次のように述べている。『「準備すれば短いスピーチができる力」や、「質問する力」、「会話での対応力」、「即興で話す力」などは、テストで測りたい能力の例である。』(p.63)実際に、これらは育成したい力である。(そもそも、育成したい力と評価したい力は同じはずであり、このことは「指導と評価の一体化」という言葉に表れている。)

一方で、そのようなテストによる評価方法の開発や実践は喫緊の課題であるものと認めつつ、現時点では多数の生徒を短時間で評価を行うため、個々の生徒の自己評価により評価を行なっている。生徒の内省による振り返りということであり、成績に反映されるものではない。

「留学生授業」で用いている自己評価は表1のルーブリックを用いて行なっている。このルーブリックは、本授業が始まった2016年から用いており、生徒の変容を測るデータとしても活用している。

その一方で、文部科学省学習指導要領解説外国語編(2018:14)に、次のような一節がある：

「理解する」、「表現する」という単に受け手となったり送り手となったりする単方向のコミュニケーションだけでなく、「伝え合う」という双方向のコミュニケーションも重視している。

この観点から表1のルーブリックを見返すと、これは、「自分」が会話に参加したか、「自分」が話せたか、「自分」が聞けたか、という点についてしか振り返りができていないのではないかと。

今後の課題として、双方向のコミュニケーションについて、インタラクションという観点が必要になる。あらためて、指導者は、スピーキング指導といったときに、どのような資質・能力を育成したいかということ整理、

検討したうえで、カリキュラムを開発しなくてはならないといえるだろう。

## 2.5 生徒の変容

本稿執筆時点で、2018年度「留学生授業」は3回目を迎えており、年次進行中である。ここでは、2017年度の「留学生授業」における生徒の変容を見て、成果を検証したい。

前項の表1で示されたルーブリックについて、各回の平均値を追跡調査すると表2のようになる。

	1回目	2回目	3回目	4回目	5回目
コミュニケーション	2.08	2.18	2.28	2.37	2.68
話すこと	2.09	2.27	2.33	2.39	2.59
聞くこと	2.32	2.31	2.58	2.69	2.86

表2 2017年度各回のルーブリック回答平均値

「聞くこと」が、2回目が1回目を下回ったことを除いて、回を増すごとに自己評価が上がっていく様子が見える。中には話題の内容や生徒に課されている負荷が大きいものがあるのにも関わらず、着実に自己評価が上がっているのは、大変に興味深い。

また、同じく前項の表1で示されたルーブリックの第1回(初回、5月実施)と第5回目(最終回、2月実施)について統計処理を経て比較すると表3のようになる。

項目	平均値(SD)	平均値(SD)	df	t値	p値	効果量
	1回目	5回目				
コミュニケーション	2.06 (1.41)	2.69 (0.88)	302	-8.63	.000*	r = .45 (中)
話すこと	2.09 (1.03)	2.6 (0.73)	302	-8.124	.000*	r = .42 (中)
聞くこと	2.32 (1.06)	2.86 (0.73)	302	-8.075	.000*	r = .42 (中)

表3 2017年度1回目と5回目の自己評価の比較

生徒の自己評価について、中程度の優位な伸びが見られている。当然、2年次の英語の学習指導は「留学生授業」だけではない。しかし、毎回本授業が終わった直後にとっているデータとして、各項目の達成感が上昇したことは本授業を複数回実施している効果として見る事ができるのではないだろうか。

2018年度は諸事情により、実施時期が年度後半に集中しており、授業における他の学習内容（また、それに伴う定期考査の試験範囲を含む）を圧迫している面があると感じているが、筆者としては年間5回が最低限必要な回数と感じている。これを下回ると、生徒のスピーキングに臨むトライアンドエラーの機会が確保できないからである。集中的に実施した方がいいとの考えもある一方で、他の学習活動のバランスを考え年間どの時期に実施するか、検討する必要があるだろう。

## 2.6 アンケート調査

2017年度は1回目と4回目にアンケート調査を実施している。毎回実施しないのは、授業内での活動時間を圧迫しないためである。

- ①「外国語を話すこと」への意欲
- ②「外国語を身につけること」の必要性
- ③「英語を話すこと」への自己評価
- ④「授業中に外国人と外国語で話すこと」の必要性

こちらは、5段階の回答形式で、「5」が高評価（積極的に話したい、ぜひ身に付けたい、よく話せた、とても必要性を感じる）で、「1」が低評価（話したくない、必要性を感じない、まったく話せなかった、必要性を感じない）である。二度実施したアンケート結果を比較すると表4のようになる。

項目	平均値(SD)	平均値(SD)	df	t値	p値	効果量
	1回目	4回目				
意欲	3.45 (1.41)	3.19 (1.42)	331	2.797	.005*	r = .15 (小)
身に付ける 必要性	4.14 (1.32)	3.81 (1.54)	331	3.087	.002*	r = .17 (小)
自己評価	2.75 (1.21)	2.47 (1.32)	331	3.109	.002*	r = .17 (小)
授業で話す 必要性	3.85 (1.31)	4.02 (0.87)	296	-2.171	.031*	r = .13 (小)

表4 「留学生授業」についてのアンケート

これについては、予期しない結果が出た。有意な伸び

が見られたのは「授業で話す必要性」のみでそれ以外の項目は有意な減少が見られた。しかし、どれも効果量は「小」であった。これは、年度末にやや難しい課題に挑戦したことにより自信を少し失った可能性があるが、今後の検証が必要である。

アンケート自由記述項目では、「話したいという気持ちがあれば通じるということがわかった」というように、本授業を通じてコミュニケーションに対する意欲・興味・関心が促進されたことがうかがえる回答が見られた。そして、「楽しかったけれど、英語が思うように出てこなかった」という意見が多かった。留学生授業そのものに対する期待は大きい一方、英語が自在に使えなかったことについて苛立ちを感じていることが伺える。そのことが「思ったほど話せなかったから、これからも勉強したい」という回答のように、学習意欲の向上につながるというサイクルが望ましい（この回答も相当数あった）が、そうはならず学習意欲の減退になってしまわないよう、日々生徒を励ましたい。これは、本プロジェクトのみならず、他の英語学習、しいては教育全般に言えることであろう。

## 3. 探究活動における実践

### 3.1 学校設定科目「SSH探究」

SSH（スーパーサイエンスハイスクール）の指定を受けている本校では、2016年度より学校設定科目である「SSH探究」という授業を行なっている。本科目は、2018年現在、1・2年次において月一回程度、土曜に連続4時間行われている。1年次では研究活動の基本的な方法を、2年次では、「生物」や「心理学」など様々な分野に分けられた講座のなかから、各生徒が自分の興味関心にあったものを選択し、1年間探究活動を行う。「英語特講」もそのうちの一つである。学校設定科目「SSH探究」についての詳細は、東京学芸大学附属高校スーパーサイエンスハイスクール研究開発実施報告書（2017：13）（2018：41-50）を参照されたい。

### 3.2 「英語特講」について

「英語特講」は、主に英語教育や言語、外国文化などについて興味関心がある生徒が選択する。中間発表におけるポスタープレゼンテーションや、口頭による最終発表、最終成果物としての論文執筆を英語で行うことが大きな特徴である。

「英語特講」は本校において学校設定科目「SSH探究」が始まって2年目にあたる2017年度より開講されてい

る。

現在のところ、10名程度の生徒が選択している。担当は執筆者（光田）および英語担当教員1～2名であり、少人数指導を受けられるという点では恵まれている講座と言える。

年度当初に生徒が興味をもったテーマに合わせて、英語教育学や言語学のごく初歩的知識を担当者の講義により学ぶ。英語教育に興味を持つ生徒がいたら、第二言語習得理論を、英語の単語の由来に興味を持つ生徒がいたら英語史を学ぶといった様子である。わずかでもその分野に関する知識を持つことで、研究テーマの設定が大きく変わってくる。また、1学期の間は授業内で各生徒がどのような研究をすることを考えているか、発表し、生徒がお互いに考えていることを発言し合う中で、研究テーマを深めていく。夏休みを迎えるまでに、大体の研究の方向性が決まってくる。10月には、2年生全員が中間発表として、ポスター発表を行う。その後、研究の進捗状況の報告をして助言を受け、論文の書式などについて学んだあと、冬休みを通して論文を書き、3学期に最終発表と論文提出を迎える。

なお、日常の研究に関する指導は日本語で行なっている。また、論文の英文チェックについては、本校の外国人講師であるALTにも正規の業務として、携わってもらっている。

### 3.3 「英語特講」と英語科の授業の関連

「英語特講」は現在では10名ほどしか選択していないが、英語を通して探究活動を1年かけて行う事例はまだそれほど多くはないと思われる。そのため、そのカリキュラムを開発するべく、生徒は当面少人数で行なっていきたいと考えている。

この「英語特講」は、当然普通の英語科の授業とは無関係ではない。ことさら、英語の発信力向上をめざす科目「英語表現 (I・II)」では、「やりとり」「発表」の技術およびコミュニケーションへの意欲の向上を狙っている。SSH探究では、探究活動を通して学んだ知識を運用し、課題解決の資質や能力を向上およびグローバルな視点を養うことを狙いとする。特に「英語特講」ではこれを英語を用いて行うので、互いの相互作用が期待できる。

(図1)

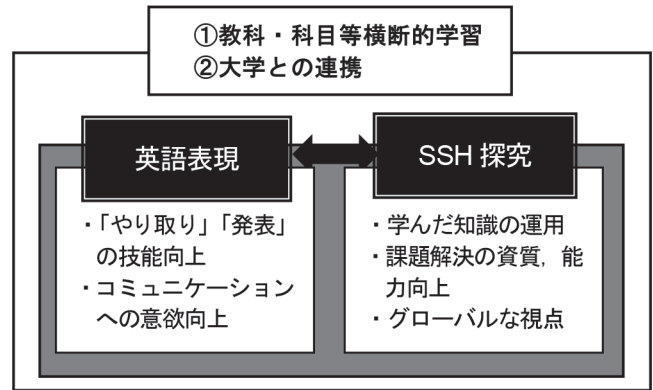


図1 英語表現とSSH探究「英語特講」の関係

すなわち、英語表現で学んだ英語の発表技術を、SSH探究で実際に活用し、そこで実際に用いたことで英語の技術がさらに向上するというサイクルである。

また、当然4技能全体を育成する科目「コミュニケーション英語」で学ぶ知識や技術も無関係ではない。そもそも英語科の科目の設定は、外国語としての英語を身に付けるという単純な目標において、科目による領域分けのようなものが明確に存在するものではない、と考える。

### 3.4 「英語特講」における留学生の支援

「英語特講」では、初年度より、本研究の一環として、留学生に参加してもらい、生徒の学習の支援をしてもらっている。

2017年度では、10月の中間発表のポスタープレゼンテーションおよび3月の最終発表会に留学生を招いて指導・講評をお願いしている。2018年度ではこれに加えて7月にも研究計画の発表の場を設け、生徒に助言を与える機会を作った。



写真3 ポスタープレゼンテーションの様子

写真3は10月に実施される中間発表でのポスタープレゼンテーションの様子である。この中間発表では、「英語特講」のみならず、他の講座でも外部の講師が招かれ全生徒がコメントをうける。また、フィードバックとして、2018年度では講師が事後にパソコンで各生徒にコメントを入力し、生徒はそれを受け取った。「英語特講」においては、発表、留学生による質疑応答、事後のフィードバックの全てが英語で行われる。次項で、生徒の反応について述べる。

なお、発表相手が留学生以外の場合では、相手に合わせて日本語で発表することは認めている。聞き手は本校生徒の他に保護者や本校受験を考えている受験生などがある。彼らはこの場では英語で理解することは求められていない。発表者にとって、英語が理解できない相手に対し研究成果を発信することができないとしたら、コミュニケーションの枠を広げるために外国語を学んでいるのに、なんとも皮肉なことになる。それに加えて、研究内容自体を母語で深めることも重要である。

### 3.5 生徒の反応

前項でみたように、中間発表ではポスターでの発表や質疑応答を英語で行う。これは高校生にとっては、相当にハードルが高い。もともと英語を用いることに高い意欲を持っている生徒が本講座を選択しているのだが、英語圏の帰国子女だけでなく、どちらかというと英語が苦手な生徒もあえて本講座を選択している生徒もいる。

ここでは、前項で述べた中間発表に対して、生徒がどのような感想をもったか、取り上げたい。なお、感想は当日の発表が終わった数日後のもので、パソコンで入力されたフィードバックはこの時点では受け取っていない。

【質問1】 事前には留学生に対して発表することにどのように感じていたか

- ・言語が違う相手に対して伝わるかどうか不安が大きかった。
- ・外国の方に英語で発表するのはすごく緊張していたので台本を作って練習していました。どんな言い方をすればネイティブの方に通じるのか凄く考えて台本を作ったので内容はおそらく伝えることが出来たと思います。
- ・自分が言いたいことが伝わるか（内容も、自分の英語力も）心配で緊張した。

- ・事前にはとても緊張していて、台本をA4サイズ二枚分いっぱい書いたものを用意するくらいに心配していた。

【質問2】 実際にやってみてどう思ったか

- ・発表はある程度伝わっているようで、足りない部分は質問をしてくださった。肯定されても否定されても意見が聞けたことが嬉しく、具体的なアドバイスがもらえてよかった。
- ・実際に発表を聞いていただき、質疑応答を通して気付かされることが沢山あったので良い体験が出来ました。また、質問が聞き取れなかった事があったのでリスニング力がまだまだ足りないなど痛感しました。
- ・ポスターやジェスチャーも交えながら、何とか伝えることができた。内容はまずまずだったが、海外の方に自分の探究のテーマの必要性や面白さを共感してもらうことができて、少しだけ自信になった。また、英語や物事の考え方において、日本人同士では不十分な所も説明なしに伝わってしまう部分がある。しかし外国の方にはそれが通用しないので、自分にとって足りない部分を細かくかつ数多く洗い出すことができたように感じた。英語の表現力についてももっと高めていこうと思った。
- ・やってみるときのにも緊張して、まったく質問の単語が聞き取れなかった。ぎりぎり質問の意図はわかったものの、説明するために必要な単語がわからなかった。説明自体は通じたらしく、台本は役に立ったが、アドリブができなかったため、どうにか対策しなくてはならないと思った。

事前にはとても緊張している様子が伺える。台本を作ったという生徒もいた。

事後の感想では、苦労はしたものの概ね達成感を得られたようである。未知のことに挑戦しやりとげたことはそれだけでも十分に教育的価値はある、と考えられる。さらに台本は役に立ったがアドリブができなかったという感想は重要である。実際のコミュニケーションはその場で作られるものだからである。まさに「発表」と「やりとり」というスピーキングにおける2領域について、後者の技能を伸ばす必要性を実感したのであろう。それに応えるようなカリキュラムを構築したい。

ここであげられたような体験をし、英語学習をさらに進めていくわけだが、これこそが3.3で述べたような

「英語表現」と「SSH 探究」の学びのサイクルなのである。実際に、「英語の表現力についてももっと高めていこうと思った。」というコメントもあったように、本研究プログラムが生徒の学習を促進するような環境を、引き続き作っていききたい。

## 4. 地歴・公民科における実践

### 4.1 実施の背景

平成30年度の本校(附属高校)学校経営計画の中の「育みたい生徒像」として、以下の文章が掲載されている。

「柔軟にダイバーシティを受け入れ活用する力  
東アジアをはじめとした海外の研究機関・大学・高校と連携して、共同研究及び交流を行うことで、グローバル化に対応した、異なった文化・価値観を持つ人々と協働しその多様性を生かしていく柔軟な知性を育成する。そのための英語力をはじめとした豊かなコミュニケーション能力を育てる。」

本校は長きにわたり、タイ国生徒や海外生活経験を持つ帰国子女の受け入れなど、多様なバックグラウンドを持つ生徒の受け入れを行ってきた。近年ではSSH(スーパー・サイエンス・ハイスクール)指定を受けたことによるタイのサイエンス高校との相互交流、アジア各国から100名近い生徒が来校する「さくらサイエンスプログラム」受け入れ、学習旅行でのタイ・韓国訪問、その他多くの海外の学校関係者の見学受け入れなどの実績も多様である。しかしこれらの実践は通常授業の枠外で行われることが多く、いわば「特別授業」の形態をとるものが多かった。そこで普段の授業の中で、生徒が外国人や多様なバックグラウンドを持つ人と直接語り、自身の価値観を再構築するような機会を提供することを目的とし、立ち上げたのが本プロジェクトであった。本プロジェクトは、すでに紹介されてきた通り、当初は東京学芸大学の留学生を英語科の授業に招聘し、彼らが英語で授業に参加することを想定していた。しかし多くが英語を母国語としない留学生との交流は、語学学習だけではない多くの可能性を本校に提示してくれた。冒頭で紹介した学校経営計画の文章に示された「グローバル化に対応した、異なった文化・価値観を持つ人々と協働しその多様性を生かしていく柔軟な知性を育成」し、「英語力をはじめとした豊かなコミュニケーション能力」を育成するための試みとして、公民科の東京学芸大学の留学生を囲んだ対話形式の授業実践を紹介する。

### 4.2 現代社会「イスラーム検定を作ろう」での実践

本プロジェクト3年目の新たな試みとして、2年生必修の現代社会に東京学芸大学のムスリム(イスラーム教徒)の学生を招き、イスラームについての理解を促す授業開発を行った。(なお、この授業は附属学校特別開発プロジェクトの一環として行われた。本稿は留学生を招聘しての授業作りを主軸としているため、公民科の授業としての概略説明はここでは行わない。)地理A・世界史A・現代社会の合同授業として行われ、生徒はそれぞれの分野でイスラームについて学び、その集大成として現代社会の中で「イスラーム検定」を作る、という構想である。本授業の最後は、実際のムスリムを授業に招いてこの検定を見てもらい、どう思うのか、また生徒との対話を通じて、教科書で学ぶ知識と、実際に共存する相手としてのムスリムに関する知識のギャップを埋めようとするのが狙いであった。この授業に欠かせないゲストスピーカーとなるムスリムは、東京学芸大学の荒井正剛先生(社会科教育学)や椿真智子先生(地理学)、小林春夫(哲学・倫理学分野)にご尽力いただき、東京学芸大学で学ぶウズベキスタン出身の留学生やインドネシア出身の教員研修生を紹介していただいた。今回の授業は、各教室に1名か2名のムスリム(ムスリマ)学生に入ってもらい、相互に自由に対話をするという形式で行われた。イスラームについて教科書や資料集で学んできた生徒からは、「無宗教といわれる日本で、ムスリムとして生活するのは大変ではないか?」「豚を食いたいと思ったことはないか?」「実際の豚を見たらどうなるのか?」などの質問があり、比較的に宗教的に寛容だというウズベキスタン人の学生が自身はお酒を飲むこと、断食や礼拝を行わないことを話すと、多いに驚いた様子であった。インドネシア出身の教員研修生からは、インドネシアの多くの学校が宗教的に混在する学校とイスラーム校に分かれていること、彼女が学んだイスラーム校では、コーランを読むためにアラビア語の授業があったことなど、学校生活について議論が弾んだ。逆に留学生・教員研修生からは、「イスラームについてどんなイメージがありますか?」「私たちは怖いですか?」といった問いが投げかけられ、すぐに「怖くないです!」と首を振って答えていた姿が印象的であった。生徒たちはこの対話を通じて、自分たちが怖いと思っていたのは目の前にいるその人たちではなく、無知によるものだと感じたのだろう。

世界各地の文化や歴史、風土を扱う地歴科でも、このような各国からの留学生を招いた授業や彼らとの対話形



式の授業の実践意欲が高まっている。しかしそこで課題となるのが、語学である。今回招いたムスリム（ムスリマ）の2人は大変日本語が流暢で、教員が介在せずとも日本語で生徒とのコミュニケーションをとることが可能であった。英語でのコミュニケーションがとれる留学生は多いが、より専門的かつ抽象的な事項を説明できる日本語能力を持つ留学生となると、限定されてしまう。どのような形で意義ある対話を実現するのか、対話までに何をこちらが準備できるのか、地歴科で日常的に実践されるまでには多くの課題もあろう。



写真4 対話授業の様子

## 5. 今後の展望と課題

### 5.1 大学との連携

本稿のまとめとして、今後の展望と課題について述べたい。本研究は、2016年度よりSGH-A（スーパーグローバルハイスクール・アソシエイト）校としての実践として校内奨励として始まり、2017年度には2カ年の研究として平成29年度東京学芸大学「特別開発研究プロジェクト」として続けているが、この研究で重要なのは、高大連携としての授業プログラムの開発という点である。

当初、高大連携といっても、高校と大学の関係は人材派遣のやりとりを行うことが主であった。しかし、回数を重ね授業の枠組みが固まるにつれ、アンケートの分析や授業の内容、生徒へのフィードバックについての検討を行うようになっていった。本研究では、その連携を重視し、2018年度の5回の留学生授業においても、生徒のアンケートや自己評価を年間を通じて追跡し、より詳細な分析をし、発信力・対話力がより身に付く授業プログラムを開発することを狙っている。今後も、より大学との連携を強化して生徒の学びと発信力の向上を目指したい。

### 5.2 本研究の今後の方向性

本研究は、前項で述べたように、2018年現在は、東京学芸大学「特別開発研究プロジェクト」（2017年採択）のもとでおこなっている。本プロジェクトは2カ年計画なので、本年度末で終了となる。しかし、本研究と実践は継続して行うことが是非とも必要であると筆者は強く感じている。

本実践に関連する研究として、第31回「英検」研究助成の入選を受けている。また平成30年8月には、関東甲信越英語教育学会第42回大会で口頭発表を行っている。今後、積極的に研究成果を発信し、より発展させたいと考えている。

留学生を高校に呼ぶことについて、予算がかかっていることは間違いない。したがって、現状では「お金があるからできること」となっている。しかし、高校を訪れ授業のアシスタントをすることで単位認定とするような仕組みが大学で構築できれば、留学生としても学びの場であるということが明確になり、持続可能なプログラムとなる。留学生にとって学びの場であるということは、本稿2.2に示したように、生徒をリードする実習としての側面もあるからである。実際、複数回参加している留学生は、生徒を上手にリードしていることが、教員から見て感じ取れる。

生徒の英語を用いた活動について、数年前まで、生徒の英語での発表というのは、あらかじめ辞書をひき文法的に間違いのない英文を丁寧に作り上げたものを読み上げる、ということが普通であった。しかし、最近では、用意した原稿がなくても、英語を用いて話すことに抵抗を持たない生徒が増えてきているように思える。この二つは両方とも欠かすことのできない大切なことである。授業者としては、この生徒の変化に応じた指導を行う必要があるであろう。この傾向は、本研究を今後も継続していくなかでも進行していく変化であることが予想されていくので、常に生徒の実態を観察しながら柔軟に改善を重ねて行きたい。

本研究を通した生徒の変容について、英語の授業および探究活動、地歴公民など様々な場面において、その実態をより詳細に観察したい。そして、より深い学びが実現できるよう、本プログラムを発展させたい。本プログラムはまだまだ発展途上である。3年目にしてようやく枠組みが整ってきた。英語科の授業だけでなく、探究活動や他教科への発展の兆しが見えてきた。今後も地道に研究を継続して行きたい、様々な場面でその報告をしたいと考えている。

### 参考文献・引用文献

- 小泉利恵・印南洋・深澤真（2017）「実例でわかる英語  
テスト作成ガイド」大修館書店
- 東京学芸大学附属高校（2017）「平成 24 年度指定スー  
パーサイエンスハイスクール研究開発実施報告書（第  
4 年次）」
- 東京学芸大学附属高校（2018）「平成 24 年度指定スー  
パーサイエンスハイスクール研究開発実施報告書（第  
5 年次）」
- 文部科学省（2018）『学習指導要領解説外国語編』
- 光田怜太郎・小太刀知佐（2018）「留学生授業の実践—  
授業での留学生とのディスカッションと言語学習—」  
（『東京学芸大学附属高等学校研究紀要第 55 号』（65-74,  
2018 年））